

書 評

平岡昭利編著『離島研究Ⅲ』

B5判, 221 ページ, 2007 年 12 月刊, 海青社, 3,500 円 (税別).

本書は同編著者による『離島研究』(2003 年 6 月 7 日刊), 『離島研究Ⅱ』(2005 年 9 月 15 日刊) に続く同形態の「シリーズもの 3 冊目」として出版された。前 2 冊と同じで 12 の島々について複数の執筆者が分担記述するというスタイルを踏襲している。

編者はタイトルの「離島」という言葉を好きではないとしながら、島々を取り巻く環境が厳しさを増す状況を考慮し、「島嶼研究」とはせず、あえて「離島研究」にしたという。

そして、このようなタイトルとは逆に章立てには「島嶼」が用いられていて、編者の苦心の様子が推察できる。これは評者も同様に「離島」にはどうしてもマイナスイメージが含まれてしまう。かといって、日常一般的に使用されていない「島嶼」ではピンとこない。評者のこのジレンマは今後も続くだろう。

評者の住む沖縄県では「離島」の対極として、「本土」という呼称(通常=沖縄島をさす)が日常使用されているが、沖縄島住民の優越感がその裏にはあると考えられる。しかしながら実はこの「沖縄本島」という表現は、先島諸島(宮古・八重山)の住民には反感が強い。琉球王府時代に人头税などの重税に苦しめられた苦い思い出があるためである。したがって無意識のうちに、現地住民にいやな思いをさせてしまうこともある。

けれどもこのような「沖縄本島」のささやかな優越感は「本土(=日本本土)」というさらなる上位レベルに対する劣等感の裏返しに過ぎない。

このような状況の中で「琉球=辺境(外地)」「ヤマト=中心(内地)」という日本人全体に普及している価値認識についても「異論」がある。特に第 2 次大戦末期のスローガン「本土決戦」「皇土防衛」では、沖縄県は「本土」にも「皇土」にも含まれなかった。ある意味ではこの認識が現在も

続いているのである。

したがって評者は意識して「沖縄本島」や「本土」を避け、「沖縄島」や「沖縄県外」を用いてきた。あるいは歴史的には「ヤマト」も使用している。いずれにしても全体が「島国」である日本なのだから、あまり「上下」を意識せず「対等な関係」で使用できる表現が配慮工夫されるべきである。

日本列島・西南諸島全体さらには東アジア島嶼部全体を複眼的にもっと「多様な地域」としてとらえるべきである。「中心と辺境」「中央と周辺」という安易な序列化には妥協できないというのが評者の意見である。

さて本書の目次は以下の通りである。

I 島嶼への進出と移動と結びつき

1 章: 明治期における尖閣諸島への日本人の進出と古賀辰四郎

2 章: 五島列島における他国漁業者の漁業権獲得と定着

3 章: 植民地期の朝鮮・済州島城山浦における日本人の活動

4 章: 宮古島における人口還流と社会ネットワーク

II 島嶼の産業とその新しい動向

5 章: 沖縄県の離島における特産品開発と流通

6 章: 長崎県・対馬におけるインバウンド観光の展開と課題

7 章: 長崎県・上五島におけるキリシタン・ツーリズムの展開

III 島嶼の集落・景観・社会

8 章: 沖縄県・多良間島の集落空間とその構成原理

9 章: 奄美大島における臨海集落の空間構成一大和村の事例—

10 章: 昭和初期の奄美大島における景観復元の試み—渋谷フィルムを用いて—

11 章: 新潟県・粟島における特徴的な集落形態と産業構造

12 章: 沖縄県・浜比嘉島の架橋化と島嶼社会の変容

1 章では尖閣諸島への日本人の進出を、古賀辰四郎という人物を通して明らかにしている。現在

は無人島である魚釣島には、古賀村集落が存在し240人余が居住していた(1908年)という記録は、昨今東シナ海海底資源をめぐり注目される地域であり興味深い。

2章では国境に近い五島列島で、他国からの漁業者が漁業権を獲得するプロセスを考察した研究である。陸上の土地所有権などと同様、海上にも漁業権があるということを再認識させられる。

3章は済州島への日本人の進出と定着過程を追いながら、島の東端に位置する城山浦の土地利用・土地所有を描いている。4章では沖縄県でも特に同郷意識の強い宮古島の出身者ネットワークを分析し、Uターン・Jターン現象を考察している。

5章は離島の地域振興で特産品開発が有効であるとし、沖縄県産品をあつかう「わたしたのショップ」で販売されてきた離島製造商品を検討し将来の展開に提言をしている。6章では韓国人旅行者が増加している長崎県対馬に注目し、インバウンド観光の課題を考察している。

7章では同じく長崎県上五島におけるこの地域のキリシタン遺跡に注目し、その観光資源としての可能性を論じている。

8章では沖縄県多良間島の集落が、十二支の方位観に基づいて形成されているという。沖縄では風水思想の影響が根強く残っているが興味深い報告である。

9章10章は奄美大島に関する研究である。9章では民俗的な視点や伝承さらに地名から集落を考察している。

10章では70年以上前に撮影された写真から、景観を復元(復原)考察していこうという興味深い手法を用いた歴史地理的な研究が紹介されている。改めて歴史的な景観について考察する際、過去の撮られた写真の意義=資料的な説得力を考えさせられる論考である。

11章では新潟県粟島の産業構造の変化を集落形態との関連でとらえた研究である。12章は沖縄県浜比嘉島に関して架橋建設にともなう変容を考察したものである。これに関連するものには『離島研究Ⅱ』にも浜比嘉島における「架橋効果」の考察があり、こちらの方と比較して読んでみることを勧めたい。

しかしながら「架橋」には「効果」だけではなくマイナスの側面もある。評者が浜比嘉島や伊計島で学生諸君と行った聞き取りでは「不法投棄」や「治安面」での対応が増え、かえって住みにくくなったという声も聞かれた。

こんな中で浜比嘉島の南隣にある津堅島では、架橋計画に反対を唱えている。近年津堅島は架橋のない島として、修学旅行生が増えているという。

評者もわずか25分間の船旅=フェリーでこの島に渡ることにより「魅力」を感じ、手頃な巡検地として来た。参加学生の評判もすこぶる良い。今後はこのような「島の情緒」を残す方が「架橋効果」や「公共事業効果」以上に、「観光客集積効果」になるように思う。

以上12章(12本)の論文は、それぞれの研究者が独自の切り口で生き生きと「島嶼」を地誌的に描いている。従来「離島」はどちらかといえば「マイナスイメージ」でとらえられてきた傾向にあったが、本書に収められた論考はいずれもそれを払拭し、新たな研究の方向へ読者を導いてくれている。

これから島嶼研究を始めようという若い研究者、とりわけ学生諸君にはどの論文も大変参考になる。特にこれから卒業論文などで「島」を研究してみようという方には「研究手法」を学ぶ絶好の論文がそろっている。同シリーズ前著の『離島研究』、『離島研究Ⅱ』とともに、図書館や研究室に備えてほしい3冊である。ぜひ多くの方に勧めたい。

(西岡 尚也)

吉野正敏著『気候学の歴史—古代から現代まで—』

A5判、437ページ、2007年6月、古今書院、5,600円(税別)。

著者吉野正敏を改めて紹介するまでもないだろうが、筑波大学を定年退官して後80才になろうとしているが、今なお第一線で活躍している気候学者・地理学者である。総計437ページにも及ぶ集大成ともいえる大著である。とは言え、本書に納まりきれない業績も多々あることも事実であ